
フタカラ

うわの空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フタカラ

【Nコード】

N5644T

【作者名】

うわの空

【あらすじ】

ヒトカラに行って通された部屋には、女の子の幽霊がいました。

俺の趣味は一人でカラオケに行くこと、そう、ヒトカラだ。土曜日になるといつも、同じカラオケ店に歌いに行ってる。その店はいつも空いてて、穴場だからだ。

寂しい？そんなことない。むしろ気楽だ。俺は音痴で、他人とカラオケに行くと大抵笑われるから。一人の方が思いっきり歌えて気持ちいい。

ということでも、今日も、ヒトカラに来た。

「18番ルームでお願いします」

そしてその日初めて、18番ルームに通された。

ドアを開けて、俺は驚愕した。

その部屋のソファーにはすでに、女の子が一人ポツンと座っていた。

肩までの黒髪、白い肌。5、6歳くらいに見える丸い顔。くまのワッペンがついてるピンク色のトレーナーに、白いスカートとタイツ。今は夏だというのに、その子の格好は明らかに冬服だった。

そしてその子の身体はちょっと、透けていた。

俺は急いでフロントまで走った。俺には靈感はない、はずだけどもあれはどう見ても幽霊だ。部屋を変えてもらわないと、怖い。

ところがフロントには、『只今満席です』の札が立っていた。珍しい。このカラオケ店が満席になるなんて、そうそうないことなのに。

俺はしぶしぶ18番ルームに戻り、そっとドアを開けた。

やはり、女の子が座っていた。そして、こちらと目が合った。

「うおおい……」

俺が思わず情けない声を出すと、今度は女の子の方がびっくりしたような顔をした。

迷った。歌うのを諦めるか、他のカラオケ店に行くか、ここで歌うか。だけど他のカラオケ店だって、もう満室かもしれない。

「……」

俺は恐る恐る部屋に入り、女の子の向かいのソファにゆっくりと座った。デンモクをいじるふりをして、女の子の方をチラ見する。すると、また目が合った。

女の子が笑った。さっきから思っていたことだが、けっこう可愛い子だった。

俺はとりあえずアニメソングを一曲入れて、向かい側の女の子を気にしながら歌い始めた。明らかに下手くそな俺の歌声が、部屋に響き渡る。

歌ってる途中、やっぱりどうしても気になって女の子の方を覗き見た。

彼女は嬉しそうな顔で、曲に合わせて手を叩いていた。叩いてる音は、聞こえないけど。

そのあと何曲か歌ったけれど、どの曲も女の子は嬉しそうに聴いていた。

「…俺の歌、下手くそだろ？」

俺は思わず、苦笑いしながら女の子に話しかけた。女の子は一瞬キョトンとしてから、ふるふると首を振った。それからまた、嬉しそうに笑った。

「君の姿は、他の人には見えてないの？」

この子は怖い幽霊じゃなさそうだと思って気が抜けたせいか、また女の子に話しかけた。女の子は悲しそうにうなずいた。どうも、この子の姿が見えたのは俺が初めてらしい。

「えっと…君の名前は？」

そう言つと彼女は、首を振つた。さつきから思っていたが、彼女は話せないようだ。幽霊だから話せないのかどうなのかは、よく分からないけれど。

この子はどう考えても幽霊だけど、俺が歌っているのを嬉しそうに聴いてくれる。聞こえないけれど手拍子をしてくれる。それがちよつと嬉しかった。

俺はデンモクを持ってゆつくりと彼女の方へ近づき、隣に腰かけた。彼女はきよとんとした顔でこちらを見ている。

「なんか歌ってほしい曲ある？」

俺が訊くと、女の子は大きな目をさらに大きくした。それからニコニコと笑つと、デンモクの画面を指さした。『童謡』だった。女の子が指をさす通りに、俺はデンモクをいじる。

彼女がリクエストしたのは、「あわてんぼうのサンタクロース」だった。

外では蝉が鳴いているというのに、クリスマスソング。季節外れだなあと思いつつ、だけどそれは言わなかった。

「歌えるかな…」

と言いつつ、予約をする。イントロが流れ出した途端、彼女の目がキラキラと光った。

「あわてんぼうのーサンタクロースー、クリスマスまえーにーやーつてきたー」

彼女は手を叩きながら、とてもうれしそうに、明らかに音痴なはずの俺の歌を聴いていた。

次の土曜日も、18番ルームに通された。そしてやはり、その女の子はいた。俺を見ると、女の子は嬉しそうに笑った。どうも、俺のことを覚えていたらしい。そして俺はまた、「あわてんぼうのサ

ンタクロース」を歌った。

そのうち俺は、自ら18番ルームを指名するようになった。はたから見たら、男が一人で「あわてんぼうのサンタクロース」を歌ってるのは妙な光景だと思う。だけど気にしない。だって俺には、俺だけには、嬉しそうに聴いてくれる観客が見えているから。

俺のヒトカラは二人カラオケ、いうならばフタカラになった。彼女は、歌えないけど。

夏が過ぎて、大分涼しくなった頃。俺は夢を見た。

カラオケ店で仲良くなったあの子が出てきた。彼女は、病院のベツドの上にあった。病室から見えている木の枝には葉が一枚もついていない。どうやら、冬のようなだった。

「あわてんぼうの、サンタクロース、クリスマスまえーに、やってきた」

ちょっと音程の外れているソプラノの歌声は、彼女のものだった。それを聞きながら、隣に座っていた女性が笑った。彼女のお母さんだ、となんでか理解できた。

「クリスマスになったら、おうちに帰ろうね。新しいおうちで、一緒にケーキを食べようね」

お母さんの優しい笑顔を見て、女の子は嬉しそうにうなずいた。

気付いたら、彼女は死んでいた。クリスマス前だった。

彼女は病院で目が覚めて、自分の姿が誰にも見えていないことに気付いた。声を出そうとしても、何故か話せない。自分は幽霊になっってしまったのだと、女の子は直感的に理解した。

女の子は急いで、自分の家に帰った。だけどそこには、知らない人が住んでいた。

『新しいおうちで、一緒にケーキを食べようね』

女の子の家族は引越していたのだ。そしてその新しい家がどこ

にあるのか、彼女は知らなかった。

さみしい。さみしい。さみしい。

その時、楽しそうな歌声が聞こえてきた。カラオケ屋さんだった。病気になる前、彼女は何回かお母さんとカラオケに行ったことがあった。女の子はカラオケ店に入ると、適当な部屋にするりと入った。18番ルームと書かれた、その部屋に。楽しそうな歌声が、あちこちから聞こえてくる。

ここならきつと、さみしくない。わたしのすがたがだれにも見えなくても、わたしのこえがだれにも聞こえなくても、きつとさみしくない。

さみしくなんて、ない。

そこで目が覚めた。俺は泣いていた。目をこすりながらカレンダーを見る。今日は土曜日だった。

18番ルームに入って、俺は肩を落とした。

女の子の姿は、そこにはなかった。成仏したのだと、何故だか確信していた。

聴いている人は誰もいないけれど、俺は「あわてんぼうのサンタクロース」を歌った。

相変わらず、酷い歌声だった。

歌い終わってから、向かいのソファーを見る。ニコニコしながら歌を聴いているはずの彼女は、やっぱりもう、そこにはいなかった。夢の中の、彼女の母親の声を思い出す。

『新しいおうちで、一緒にケーキを食べようね、』

「…ちいちゃん」

俺は小さな声で彼女の名前を呟いてから、少しだけ、泣いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5644t/>

フタカラ

2011年5月26日11時55分発行